

[最新版\(英語版\)はこちら](#)

最終改訂年月: 4 January 2002

背景: 頸動脈内膜摘除術中の一過性脳血流遮断は、頸動脈のクランプ部位を横断するシャントの使用によって回避することができる。これにより、アウトカムが改善されると考えられている。

目的: 本レビューの目的は、頸動脈内膜摘除術中のルーチンシャント術、選択的シャント術、シャント術非施行にて効果を比較し、シャント術で患者を選択する際の最善の方法について評価することであった。

検索戦略: 初回レビューで著者らが検索したのは、Cochrane Stroke Group trials register、MEDLINE(1966年～1994年)、EMBASE(1980年～1995年)、Index to Scientific and Technical Proceedings(1980年～1994年)であった。また、Annals of Surgery(1981年～1995年)、British Journal of Surgery(1985年～1995年)、European Journal of Vascular Surgery(1988年～1995年)、World Journal of Surgery(1978年～1995年)をハンドサーチした。改訂版レビューは1994年1月から2000年12月までとしており、1. 初回レビューに関する上記全ての検索を反復実施し、MEDLINEとEMBASEについては更に包括的な検索方法を開発した。Cochrane Stroke Group Trials Registerの最終検索日は2001年5月であった。2. Journal of Vascular Surgery、Stroke、Annals of Vascular Surgery、American Journal of Surgery and Cardiovascular Surgeryをハンドサーチした。3. International Stroke Conference、AGM of the Vascular Surgical Society(UK)、AGM of the Association of Surgeons of Great Britain and Ireland、Annual meeting of the Society for Vascular Surgery(USA)の抄録をハンドサーチした。4. 関連する全ての試験の参考文献リストを検索した。初回レビューにおいて対象とした試験の著者全員および関連する研究を発表したその他の著者と連絡をとり、その他の既報および未発表のデータに関する情報を要請した。

選択基準: ルーチンのシャント術とシャント術非施行または選択的シャント術との比較が行われたランダム化試験と準ランダム化試験であり、頸動脈内膜摘除術施行患者を対象として異なるシャント術が比較された試験であることとした。

データ収集分析: 初回レビューでは、2名のレビューアが独立に検索を実施するとともに登録基準を適用した。1名のレビューアがデータを抽出し、これをダブルチェックした。試験の質を評価した。更新時には、2名のレビューアが独立に検索を実施するとともに登録基準を適用した。関連する新たなランダム化試験は見出されなかった。

主な結果: 初回レビューにおいて更なる試験が必要であると推奨されているが、適正な質を有しているとともに登録基準に適合する新たな試験は見出されなかった。初回レビューに含まれていたのは3件の試験である。590名の患者が含まれている2件の試験では、ルーチンのシャント術とシャント術非施行が比較されていた。131名の患者が含まれている別の試験では、シャント術と脳波検査および頸動脈圧測定との併用に関し、シャント術と頸動脈圧測定のみの場合が比較されていた。1件の試験では割付けのコンシールメントが適正に行われており、1件の試験は準ランダム化であった。可能な限り、ITT解析分析を実施した。ルーチンのシャント術とシャント術非施行との比較ではデータが制限されているが、全ての脳卒中、同側性脳卒中、または死亡が術後30日までに認められる割合に有意差はなかった。シャント術と脳波検査および頸動脈圧測定との併用が施行された患者でもデータが制限されているが、圧測定のみとの併用が施行された患者と比較して同側性脳卒中リスクの有意差は認められなかった。

レビューア見解: 1995年の初回発表時での本レビューでは、入手可能なデータが制限されているため、頸動脈内膜摘除術でのルーチンまたは選択的な頸動脈シャント術適用を支持または論駁することはできないと結論付けられている。シャント術非施行を対照群として設定した大規模ランダム化試験の必要性が示唆されている。いずれかの選択的シャント術モニタリング法ではアウトカムが相対的に良好であるとは示されていない。以降、プロスペクティブなランダム化試験または準ランダム化試験が実施されていないため、結論に変更はない。

Citation: Bond R, Rerkasem K, Rothwell PM. Routine or selective carotid artery shunting for carotid endarterectomy (and different methods of monitoring in selective shunting). The Cochrane Database of Systematic Reviews 2002, Issue 2. Art. No.: CD000190. DOI: 10.1002/14651858.CD000190.

Clib issue No.: 2005 issue 4

CRG名: Stroke

***ご注意:** この日本語訳は、試験的翻訳(Draft翻訳)版として公開するものであり、翻訳の正確さや質が保証されたものではありません。訳語の間違いなどお気づきの点がございましたら、Minds事務局までご連絡下さい。また、この試験的翻訳版はコクラン・ライブラリ2005年issue 4に掲載されたレビュー・アブストラクトの翻訳です。コクラン・ライブラリは年4回改定版が発行されていますので、ご利用に際しては、最新版(英語版)の内容をご確認下さい。